連載

私の親のおくり方

第9回

演技派女優として、数多くの作品でその存在感を発揮している秋野暢子さん。バラエティー番組などにも出演し、パワフルで裏表のない明るい人柄が多くの人に愛されている彼女は、一方で波乱に満ちた過去を抱えていた。苦しい時期を支えてくれた母の延命措置を取るか取らないか、過酷な選択を強いられた彼女の決断と、その末に訪れた心の安らぎは――涙交じりに語ってくれた。

お母ちゃん、あれでよかったよね

母に抱かれお宮参りに行く秋野さん。

今もはっきり覚えています。'95年4月17日、母は危篤状態に陥りました。私のあの時の決断は、果たしてあれでよかったのか。後悔が残りました。私の中で収拾がつかなかった。

お葬式ってよくできていますね。悲しみや後悔に浸っている間はありません。葬儀はどこで執り行うか。遺体はどう運ぶか、葬儀屋さんはどこに頼むか、お葬式の規模はどれぐらいにするのか……。いろいろなことを決めなくてはいけません。

あまりの忙しさに何も考えられないほどです。でも、後悔と悲しみに打ちひしがれていた私は、それに救われたのかもしれません。

＊

大阪・心斎橋に店を構える何代も続く呉服屋、それが私の実家でした。大阪の米屋の娘で、乳母日傘で育った母は19才の時に父と見合い結婚。

私は9才年上の兄と2人きょうだい。母が私を産んだのは40才の時でした。

「軽々しくハンコはつくな」

私が今も肝に銘じていることは父に教わりました。私が6才の頃でした。ボンボン育ちの父は気のいい人だったのでしょう。知り合いの人の負債の連帯保証人に判を押して、店も家屋敷も、すべての財産を失ってしまったのです。私たちは倉庫に使っていた4畳半と3畳の2間の家で暮らすことになりました。

それまで何不自由なく暮らしていた母は、46才で極貧生活に陥ったのです。大変どころではなかったと思います。でも、母はそれまでと変わらず毎朝キチッと化粧を欠かさず、笑顔も絶やさない。財産をすべて失った父に愚痴ひとつ言うことなく、着物を縫う内職で家計を助けていました。

家にやってくる債権者から身を隠すため、父は神戸の知人の会社に身を寄せ、うちに送金していました。債権者にはコワモテの人もいます。

「オヤジ出てこい！」

「カネ返せ!!」

そんな借金取りに、「お金は少しずつでも返しますから」と矢面に立ったのは母でした。

男の人が怖い……、幼心に抱いたその思いは、家に押しかける債権者を目にしてトラウマになったのでしょう。ひとりでお人形さん遊びをしたりお絵描きをしたり、幼い頃

撮影／片野田斉

秋野暢子さん58

あきの・ようこ
1957年、大阪生まれ。女優。'74年にNHK銀河テレビ小説『おおさか・三月・三年』でデビュー。翌'75年にNHK連続テレビ小説『おはようさん』の主役に抜擢される。その後は女優としてのみならず、絵本の出版やバラエティー番組に出演するなどマルチに活躍。'83年にTBSのプロデューサー（当時）と結婚し、'93年12月に長女を出産したが、'01年に離婚。

●聞き手・文／根岸康雄

の私の性格は、今とは正反対でした。小学生の時に吃音だったのも、その頃、置かれた環境が精神的に影響したのでしょう。

「お母ちゃん、今年は何でこんなんなん？」

そう聞いたのは貧乏になって間がない頃でした。例年の正月なら餅つきがあって、新しい着物を着せてもらい、大勢の人が来て華やかなのに、新しい晴れ着もなく訪れてくる人もいません。すると母はがま口を開いて、「おうちには10円しかないねん」と財布の中には本当に10円玉が1枚だけ。

「貧乏やでぇ」

母は私に笑顔を向けて言いました。

「ほんま、貧乏やわ」

私も母を見て笑い返しました。

幼かったせいか、10円しか入っていなかったことより、母の財布のみすぼらしさが気になりました。成人して私は海外に行くたび、母にお土産として財布をプレゼントするのですが、それは幼い頃に目にした母の財布が、ずっと頭の片隅にあったからかもしれません。

転機となった学芸会

内向的で吃音で、きちんと人にものが言えない。そんな私が小学5年生の時、学芸会の『鉛筆の国』という出し物で、〝HB〟や〝2B〟に交じって、〝F〟という役に抜擢されました。後年、同窓会で聞かされたのですが、担任の先生は私の性格を何とかしたいと思ったのだそうです。

学芸会の当日、お腹は痛くなるし熱は出るし気持ち悪くなるし、演技ができる状態ではなかった。でも母が衣装のショールを作ってくれ、「頑張れ」と応援してくれている。

やらなきゃダメだ――

たったひと言、短い台詞でしたが、何万回と練習しました。

出番の直前まで舞台の裾でガタガタ震えていましたが、自分の出番になった瞬間でした。誰かにポーンと背中を押されるように、すーっと役に入れたのです。

「Fざんす～」

そのひと言の台詞に1000人以上の生徒が〝ワーッ〟と笑った。鳥肌が立ちました。

その後は劇を行うたびに役をもらいました。舞台の上では最後まで吃音が出ずに、スラスラと台詞が出てくることに驚くばかりでした。

「この子は他人を演じることに向いている。演劇が盛んな学校に入れたらどうですか」

担任の先生のアドバイスで、父と母は私に演劇が盛んな学校への進学を勧めてくれました。あの時のうちの経済状態で、私立の中学高校に通わせたのですから、両親は相当無理をしたんだと思います。

中学時代から入部した演劇部の活動を通して、いつしか私の内向的な性格も変わりました。標準語のアクセントの練習を徹底的にしたことも、吃音の改善につながりました。

神戸に働きに出ていた父と、ようやく一緒に暮らせるようになったのは小学6年の頃のこと。父は中古車センターの店員として働き、母の内職も続きました。

高校生になった私も、ラジオドラマやテレビドラマ、芝居にも出演するようになり、家にお金を入れられるまでに自立できていました。

そして、18才の時に大阪のNHKのドラマ出演がきっかけとなり、朝の連続ドラマのレギュラーが決まったんです。

「女の子をひとりで東京に出すわけにはいかん」

そう反対する父に、「私が一緒に東京に行って、サポートしてあげるから」と後押しをしてくれたのは母でした。

それからというもの、母は月のうち3週間、東京に暮ら

'36年に結婚した秋野さんの両親。

幼い頃の秋野さんは内向的だった。（'63年頃）

すことになったのです。

「ちゃんと生きていく道が見つけられたのは、ええことや。しっかりやれ」

いつしか父もそう励ましてくれるようになりました。

連帯保証人に判を押し、人の借金を背負いこみ、財産をなくしてしまったお人よしの父。小さい頃に「動物園に行こう」と言われて、連れて行かれたのは阪神競馬場でした。

借金を抱え、正月は親戚宅で過ごすことも。左は父、右は秋野さん。（'63年頃）

父が賭けたのは〝シンザン〟という馬だったかな。

たばこも大好きで、人差し指と中指の間が黄色くなるぐらい、1日100本も吸っていたのが原因でしょう。上京して5年の'80年夏。

「お父ちゃんが死にはった……」

突然、母からそんな電話をもらいました。当時、父は右肩の疼痛に効くと、超音波風呂を備えた銭湯に通っていた。その日も銭湯から帰ってきて、「あー、喉が渇いた」と、水を飲むといきなり倒れたのだそうです。心筋梗塞。67才でした。

葬儀は大阪の四天王寺のそばの母の菩提寺で執り行いました。葬儀が夏の暑い日だったこと。叔父が葬儀を仕切ったこと。没落したとはいえ、何代も続く大店の呉服屋の店主にふさわしく、たくさん弔問客が訪れたこと。そして、お寺に出入りしていた喪服姿の電気屋さんの男の人が、ひたすら葬儀をVTRで撮影していたことを覚えています。

3度の流産に責任を感じた母

父が他界する3年ほど前のことです。

「お母ちゃん、私も20才になった。これまで育ててくれたお礼に、何か買うてあげたいんやけど、何がええ？」

私は母に聞きました。

「せやなぁ、ほんなら家を買うてくれるか」

20才の娘には大きすぎる買い物でしたが、母はずっと寂しかったんでしょうね。嫁いだ先の大店の呉服店が跡形もなくなって、40代半ばから貧乏を強いられて…。せめて、きちんとした家が欲しかったのだと思います。

「わかった、ほな家買おう」

それから5年が経った25才の時に、私はローンを組んで都内に一戸建てを購入しました。42坪の土地に建てた2階建ての家でした。

私は26才で結婚し3度の流産、特に3回目は子宮外妊娠で2か月ほど入院をしました。病院に通ってくれた母は何も言いませんでしたけど、母自身も兄と私の間に3人の子供を流産している。母は自分の体質に私が似たのかもしれないと思い悩んだのかもしれません。

「〝暢子が心配や……〟って、おばあちゃんは口癖のように言って、仏壇にしょっちゅう手を合わせていた」

後年、母が亡くなってから姪に聞きました。

「残念やったね…」

それは私が3度目の流産をした時の母の言葉で、私の体を心配する気持ちと、私の子供を目にしたい思いがひしひしと伝わってきました。

結婚11年目。

尊厳死協会に入っていた母

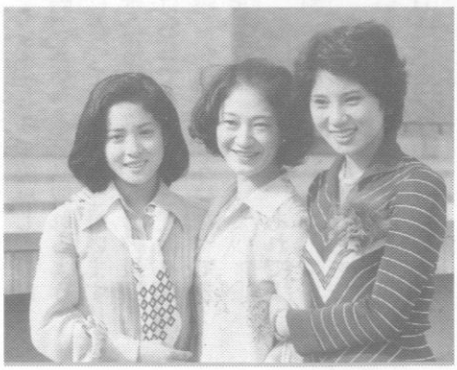
子供が生まれて1年半ほどして、母は2か月間ほど入院することになりました。すでに78才。腎臓が悪かったのです。

2か月入院して、家に戻った。

「お母ちゃん、できたらしい」

妊娠がわかって、すぐに母に報告しました。一時は流産しかけて、2か月入院。でも。なんとか安定したんです。そして'93年12月24日に、私は37才で夏子を出産しました。孫と遊ぶ母は本当に楽しそうだった。

家のリビングの小さな暖炉の前で、赤とグレーのクッションを膝ではさむようにして夏子が座っている。母がいちばん好きだったその写真は、今も額に入れてリビングに飾っています。夏子を母に見せることができて本当によかった。



『おはようさん』で、一躍人気女優に。（左から、中田喜子さん、三田和代さん、秋野さん）

てからは介護の人に来てもらいました。

「おしめは嫌だ」

母の女としてのプライドでしょうか。3か月ほどで、ひとりで頑張ってトイレに行けるまでに回復することができました。

「もう1回、ハワイに行きたいね」

10年以上も前に母と行ったハワイ旅行。オアフ島の東南にあるハナウマベイで、60才を過ぎた母が「ひゃー、きれいやわー。魚」と少女のような声を出した。

そんなことを思い出して、「うん、行こうね」と私は約束した。

それから間もなくして私は仕事でハワイに1週間ほど行くことに。心配だったので、母には入院してもらいました。滞在先のマウイ島では母が欲しがっていたクロコダイルの財布を買って。帰国してすぐに成田から病院に電話を入れました。

「お義母さん、元気にしてはるよ」

母に付き添っていた義姉は確かにそう言いました。

母が入院していた都内の病院に着き、2階にあがると、廊下で兄さんがイライラした様子で私を待っている。

「あかん、お母ちゃんが危ないんや」

急いで病室のドアを開くと、

「暑い・・・暑い・・・・」

母が苦しがっている。

「お母ちゃーん!!」

私は枕元で語尾を強くして声を掛けました。その声に母はパッと目を開いた。

あー、帰ってきたんやね・・・・。

言葉はなくとも母の思いは私に伝わってきた。そしてすぐに母の意識は混濁しました。

「この状態ですと、あと1時間以内に亡くなります。どうされますか」

主治医は私にそう宣告しました。気道確保のための処置など延命措置を取らなければ命はないというのです。

母は尊厳死協会に入っていました。

「不必要な延命措置は取らないでくれ」

それが母の意思でした。でも、母の命の判断を最終的に私が下さなければならないのか。

「30分、考えさせてください」

兄は私に判断を委ねていました。これは困った。本当に悩んだ。

お母ちゃん・・・・。私は母の顔を見つめ、最終的に母の気持ちを尊重する形で判断したのです。延命措置を取らなかった母は、主治医の言った通り最初の宣告から1時間後に、静かに息を引き取りました。'95年4月。母は78才でした。

「母と同じように子育てを」

私が大切な母の最期を決めた。延命措置を取らなかったのは正しかったのか。母が亡くなった直後から、戸惑いと悲しさと後悔の思いが、怒涛のように私の中に押し寄せた。私は押しつぶされそうでした。でも、私は母のお葬式を全部、仕切らなければなりません。

「まず母の遺体を家に運びましょう」

病院に出入りする葬儀屋さんに、その手配をお願いし、家で母を棺に納めて。「お葬式は親戚や知り合いがたくさんいる大阪で、お父ちゃんのときと同じお寺さんにしよう」と大阪までの運び方も段取りをして・・・・。誰にどう連絡するか、決めなくてはならないことがいっぱいあった。

卒園式の後、母と。いつも明るく笑顔の絶えない人だった。

弔問客は親戚を中心に100人ほどでしたが、母の死が報道され芸能関係者から、しきびと呼ばれる背の高い葉っぱだけの飾り物が届き、お寺の外までズラッと並びました。

私は気がつきませんでしたが、「こんなにしきびが並ぶのは珍しい」と近所の人が見物に来るほどだったそうです。関西では香典をいただかないケースが多いと聞きますが、母のときも香典は一切なくお返しもなし。かかった費用は総額で300万円ぐらいでした。

棺にはハワイで母へのお土産に買ったクロコダイルの財布を入れました。

「母が私を産んだのは40才、私が初めて子供を授かったのは37才。私も母と同じように年齢を積み重ねながら、これから子育てをしっかりやる」

それは出棺の前に語った私の弔辞でした。

果たして尊厳死でよかったのか。最期に母の命を決めたことに、私はずっと悩んできました。でも、離婚を経験し母と同じような年で子育てを体験した今、夏子は21才になり就活の準備をしています。私も58才になりました。母が亡くなった年に近づいていることを少しずつ実感し、死に際の大切さを感じ取れるようになってきたのだと思います。延命措置を施すより母の最期はあれでよかったと、徐々に確信が持てるようになってきました。

ね、お母ちゃん、あれでよかったよね・・・。

私は生前母が大事に使っていた自宅の小さな仏壇に、毎日そっと手を合わせています。

※モクレン科の常緑小高木。仏前に供える。しきみという別称も。